

香川発 防災拠点としての自社社屋活用 地域レジリエンス強化と水・防災意識を高める市民協働

株式会社フソウ

1. 抱えていた課題

株式会社フソウは、香川県を創業の地として、「水と共に生きる」を企業理念に、水道・下水道施設の設計・施工から運用・管理、施設に必要な技術開発や資機材の製造から調達、販売に至るまで一貫して手掛けています。当社は、創業70周年の節目を迎えた2016年に拠点施設の一つとして、香川県高松市郷東町にフソウテクノセンターを開設いたしました。本施設は、製造、物流、設計、施工、技術開発の各機能を集約した「技術」と「人材育成」の拠点としての機能を担うことに加え、地域のサステナブルな発展、レジリエンスの強化に資する地域貢献を展開していくことも重要な役割と捉えています。

フソウテクノセンター周辺は瀬戸内海に面し、海拔高度が低いため、大規模地震時には津波被害、台風襲来時には高潮被害が生じることが想定されています。同センター建設時、被害を最小限にとどめるため、津波想定を踏まえた嵩上げを行い、周辺に住まわれる住民の皆さんの「一次避難所」「津波避難ビル」としての体制・設備を整備しました。

しかし、あらゆる防災施設がそうであるように、施設を作ることだけではその効果は乏しく、地域を巻き込んだ啓発と協働が課題となります。また、水インフラ企業として、災害時における水の備えの啓発を行うことが地域防災力の向上を図る上で重要な取り組みと捉えております。こうした課題に対し、当社では、フソウテクノセンターの社屋を拠点とした市民協働を通じて、地域レジリエンスの強化、国・自治体・教育機関・企業等が展開する取り組みの周知、自助・共助・公助の啓発を行うこととしました。

2. 広報活動概要

■地域防災拠点としての社屋整備

フソウテクノセンターは、南海トラフ地震、高潮襲来等の大規模災害時に対応できるインフラを確保し、地域の防災拠点となる施設、体制を整備しています。建屋の立地は周囲より高くなっており、メインの避難スペースとなる体育館を設け、避難時に必要となる食料品等の物資の備蓄庫も備えています。緊急時には、体育館の1階は一時避難所、2階は津波避難ビルとし、高松市とも協定を結び、万一の際には地域住民を受け入れることとしています。

■水・エネルギー一体 水道関連防災設備の設置

耐震性貯水槽を整備し、応急給水用資機材、非常時トイレ設備、炊き出し用のかまどとして利用できる「かまどベンチ」を配備することで、水そのものの危機と、水を使うことも想定した備えを行っています。非常用発電機(24時間)、低騒音、微風で発電可能な風力発電設備、太陽光発電、マイクロ水力発電、空調負荷を低減する冷媒挽拌装置を設置するなど非常時の水利用に不可欠なエネルギーの面からもBCP対策を考慮した設計としています。

■平時から施設を開放 フェーズフリーの取り組み

フソウテクノセンター内に設ける体育館は地域住民の方に貸し出しており、スポーツクラブやサークルの活動場所として、ほぼ100%に近い稼働率となっています。加えて、施設内に設置する食堂「bistro FUSO(ビストロ・フソウ)」は、平日の昼食時などの利用を地域に開放し、有事の際の防災拠点である本施設にフェーズフリーで日常的に訪れていただくきっかけづくりを行っています。これらの取り組みを通じ、平時においても、水に関する自助・共助・公助に関する情報発信を行っています。移動に自動車が不可欠な地域特性も踏まえ、駐車場利用と合わせた開放を行っていることも一つの特徴です。

■地域と連携した防災訓練による地域防災力と「水」防災力の向上に資する発信と協働

コロナ禍が一定の落ち着きを見せた2023年からフソウテクノセンターが立地する乾自治会との合同避難訓練を開始しております。施設への理解を深めていただき、非常時の避難施設としての安心感を持っていただくとともに、市民の皆さんが非常時に感じる水・衛生問題の不安ごとを聴取しています。本施設に設置している設備についても説明し、「水」に関する防災・減災の自助・共助・公助に関する情報発信も積極的にを行っています。訓練内容は年を追って進化し、2025年10月には、乾自治会と3回目となる合同避難訓練を行い、自治会から32人、当社社員37人が参加しました。

■地元大学・住民と協働 防災キャンプの実施

2026年3月28～29日にかけて、香川大学等の地元学生で構成する防災学生団体「せとちで、はじめまして。」が主催する実践型防災イベント「親子で学ぶヒーローキャンプ」を本施設で開催し、地元の小学生とその保護者17人が参加し、体育館に宿泊しました。高松市、高松市教育委員会、インフラメンテナンス国民会議四国地方フォーラムにも後援をいただき、災害時の自助・共助・公助を幅広い視点で学ぶ場となりました。当社は会場を提供するとともに、社員も参加者の皆さまと一緒に宿泊し、自社に配備する耐震性貯水槽をはじめとする水道事業者が取り組む災害対策の紹介、周辺にあるインフラ設備や危険箇所を発見する街歩きをともにに行い、「かまどベンチ」を利用した炊き出し体験や防災食の調理等を行い、周辺住民との協働を図りました。



高松市指定の津波避難ビルに位置づけられているフソウテクノセンター



平時は体育館を地域住民の活動場所として開放



フソウテクノセンターの地域での役割は内閣官房「国土強靱化 民間の取組事例集」(令和5年4月)に掲載



3. 広報活動の狙い

■社会課題解決に向けた事業活動の一環として

当社を含むFUSOグループのミッションとして「Answers for Community 地域の数だけアンサーがある。」を掲げており、地域、経済、環境の三つの価値を並び立たせることで社会課題解決が図られるという考えを前提に、事業活動に取り組んでいます。地域との防災訓練、防災キャンプ等の活動は、この考えに基づくものであり、事業活動の一環として、地域の防災力向上に貢献しながら、市民の水危機・防災に対する意識啓発、そして社員の意識啓発の一助となっています。

■政策・技術を組み合わせ、体感できる水リスク、防災意識啓発

水リスクおよび防災意識の啓発は、行政の取り組みを支援することを念頭に置きつつも、民間企業が能動的に関わり、民間企業だからこそできるアプローチを図っていくことが狙いとなっています。水道・下水道を事業として担う企業として、水道・下水道の防災設備、技術、公共施設と合わせたPRを行い、市民啓発を図っていくことが狙いの一つとなります。耐震性貯水槽や非常用給水に用いる資機材の情報発信、エネルギー確保と組み合わせた水リスクに対する備えの有効性など、具体的な技術と組み合わせた広報・啓発活動ができることは、民間企業が関わるメリットの一つとして現れているものと実感しています。

■「上下水道を仕事にする」社員の意識啓発

地域との協働を図る上で、社員の意識を変えていくことも重視しているポイントです。非常時・平時のフェーズフリーの取り組みとして掲げた体育館の運用や食堂の開放、地域と連携した合同避難訓練の実施は、従業員の理解なしには実現できない取り組みとなります。中でも2023年から毎年開催している乾自治会との合同避難訓練の実施は、地域が抱える防災に関する課題を認識するうえで大切な取り組みとなっています。一人では避難することが難しい市民の方を日ごろから知ること、当社が業務領域とする水そのものの対策だけでなく、災害時を想定した際に市民の方が懸念として持たれていることを把握することは、官民連携で水道の強靱化を図っていくうえで、貴重な経験となっています。こうした取り組みを実現するための社員の意識啓発、社会課題解決を図っていくという社内の意識啓発、インナーブランディングにつなげられている点は、本活動の一つの効果となっています。

■避難行動の確認から実効性の高い訓練への進化

乾自治会との合同避難訓練は、回を重ねるごとに、単なる避難行動の確認にとどまらず、地域と企業が一体となって取り組む、有事を想定した実効性の高い活動となっています。2025年の訓練では、避難場所までの道のりを各所に配置された社員が誘導し、高齢者の方々の移動もサポート。到着後は、避難者名簿の確認や、体育館2階への誘導を行い、実際の避難、受け入れ時の行動を確認しました。この一連の実体験は、当社のソリューション開発においても有用な経験となります。今後も本訓練を継続し、地域の皆さまとともに学び合いながら防災力を高めていくことで、緊急時における持続的な対応力・すなわち地域のレジリエンスへの貢献につなげるものと考えています。

■水の企業だからこそ身に付けるべき「蛇口の向こう側にある多様性への想像力」

我々が担う水の仕事の先、蛇口の向こう側には、あまねく人々の姿があります。世代、ジェンダー、社会的役割、ライフスタイルなど、蛇口の向こうに存在する多様性を想像することが求められます。合同避難訓練、防災キャンプは、まさにその蛇口の向こう側に触れる機会となっています。こうした市民協働を通じて、市民の皆さんに水道への理解を深めていただきながら、水道事業主体ではない民間企業にとって身に付けるべき多様性に直接的に触れることは相互の重要な学びの場と捉えています。



当社体育館で行った親子で学ぶヒーローキャンプ(2026年3月)



親子で学ぶヒーローキャンプでは、社員から、施設内の防災機能や有事の際の対応、水道事業者の取り組み等を説明



地元の乾自治会と合同で行った避難訓練
当社食堂で防災食を喫食(2025年10月)



避難訓練では、敷地内に埋設されている耐震性貯水槽からの取水を実演

4. PRポイント

■幅広いレイヤーへのフェーズフリーのコミュニケーション

地域住民との合同避難訓練、地元学生団体の連携、親子キャンプへの協力等を通じて、当社施設を拠点に幅広い世代と社会レイヤーへの訴求を目指しています。また、これらの取り組みの実践の際には、自助・共助の啓発とともに、水道事業者を含む公共セクターが平時から行う公助の取り組みや水道事業の現状と将来に向けた施策についても発信を図ることが水道を担う企業だからこそ担える発信と認識し、コミュニケーションを展開しています。また、体育館や食堂を活用した「フェーズフリー」の発信により、イベントとしての一時的な広報コミュニケーションにとどまらない、平時からの地元企業と市民のコミュニケーションを創出しています。

■香川・高松発 企業活動の延長線であらゆる全国に広げるレジリエンス

水道インフラなどの防災・減災に関連した全国の施策、技術を踏まえて整備した高松市内の自社施設において、実機を使い、市民に体感してもらい、その有効性、必要性を発信しています。この活動はサステナブルとレジリエントな社会、事業活動を展開していくための延長線にある取り組みであり、そこに社員自らが主体的に参画することで、その効果を高め、この体験とコミュニケーションで得た知識と経験を香川・高松の地から全国に波及させることを念頭においています。また、地域の防災力を高めることは、災害時の受援を最少にし、結果的に広域災害時等の全国のレジリエンスを高めることにもつながるものと考えています。

■市民、教育、道路技術者など幅広い主体との連携拠点に

社屋を多くの方にご利用いただくことで、幅広い主体に少しでも防災、水道インフラの情報、水リスクの情報が伝わっていくことを目指しています。イベント実施時にはアンケートを行い、効果を確認し、フィードバックを行っています。「親子で学ぶヒーローキャンプ」には、高松市、高松市教育委員会、インフラメンテナンス国民会議四国地方フォーラムの後援をいただきましたが、今後も幅広い主体との連携を目指します。キャンプに後援いただいたインフラメンテナンス国民会議四国地方フォーラムには、当社が企画委員として参画しており、社会問題となるインフラメンテナンスの重要性について、異分野の行政職員等の幅広い主体に水道・下水道の課題に関する情報発信を行っています。フソウテクノセンターは、2025年12月4日に開かれた同フォーラムのインフラメンテナンス研修in香川の会場としても使用され、同フォーラムに参画する香川県内の自治体の道路職員、異分野の民間企業等への情報発信拠点となりました。

■「顔の見える関係」から、垣根を取り除く多様な体験

多様な主体の意識の垣根を可能な限り取り除き、社会課題解決の契機としていくことを強く意識しています。防災キャンプは、自社社屋に住民と宿泊するというかつてない貴重な経験となり、顔の見える関係が市民協働を新たなフェーズへと進めています。フソウテクノセンターに加えて、周辺に位置する物流センター等の当社施設を一体的に視察いただく環境を整ったことから、上下水道の現場に不可欠な資機材への理解を深めていただく場も提供していきたいと考えています。今後も、「Answers for Community 地域の数だけアンサーがある。」というグループミッションを実現していく「ソリューション創出拠点」として当社の四国本社を位置づけ、さらなる活動を展開して参ります。



避難訓練で行った地域住民と当社社員によるダンボールベッドの組み立て共同作業



親子で学ぶヒーローキャンプでは、配備する「かまどベンチ」を使った炊き出し体験の様子